日本で学ぶ留学生のための
ホストファミリーによるソーシャル・サポート
― ホスト意識調査の自由記述の分析 ―

原　田　登　美

1. はじめに

日本で学ぶ在日留学生（以下、留学生）のために、一般市民が行っている日常的な支援として､留学生のホームスティとそれを支えるホストファミリーの存在がある。本論では、ソーシャル・サポートを「日常生活で接する人たちとの結びつきから得られるさまざまな支援」（安部、2009、67）と定義し、日本滞在の留学生の支援者として、留学生のソーシャル・サポートを行うホストファミリーに視点を置き、その意識と経験を調査することを目的とする。

留学生は母語と母文化の環境から日本へ移動して、異なる言語圏と文化圏の日本社会の中で一定期間を学び生活する。異なる言語・文化での環境には、母語と母文化の枠組みには当てはまらない不確実な要素が多く、新しい環境に適応するためには、心理的･精神的･健康的なストレスと不安に日々向かうことが求められる。

一般に新しい環境への移動においては、ソーシャル・サポートを獲得できる対人関係の形成が適応を促進すると言われる（Adelman, 1988；田中, 2000；八島, 2004）。Adelman（1988, 188）は、「母文化での知識が常にあてはまるわけではない不確実性の多い他文化の中で、ホストの視点による帰属性を持つことで、自分は一人ではないと知ることができ、不安感や犠牲感が減じられる」と述べている。留学生はホストファミリーからのソーシャル・サポートを得ることにより、ホストファミリーとの対人関係を構築していく中でコミュニケーション方法を促進し[(1)]、異文化環境への適応が促されて社会的適応が有利に機能していくのだと理解される。

異なる言語、文化、考え方を持つ者が共に暮らすホームスティの中で、留学生とホストファミリーが一緒に生活していくためには、日常的な異文化接触の中で、互いの文化や価値観を尊重しつつ、双方が毎日の生活の中で、意識的にも無意識的にも自文化を新しい目で捉え直し、それまで持っていた考え方の枠組みを広げたり修正したりしながら、「お互いの不確実性を取り除いていくプロセスと作業」（Adelman, 1988, 185）が求められる。

ソーシャル・サポートを受けるのは確かに留学生であるにしても、留学生との暮らしの中で、数々の苦労の中にも、サポートを提供するホストファミリーもまた楽しみや成果を多く見出していることを、本調査は物語っている。ホームスティ運営の中で、ホストファミリーの重ねる暮らしの工夫と努力が留学生へのサポートとして実を結ぶのと同時に、サ

ポート提供のホストファミリー側にも学びと楽しみと多くの成果がもたらされていることは、本調査の結果が示すとおりである。

定住外国人が200万人を超え、2020年を目途に留学生30万人の受け入れを目指す「留学生30万人計画」[(2)]が提案される中、市民の立場から、留学生が安心して学べる環境を提供するホストファミリーの役割は大きく、その経験と意識のもたらすデータは貴重である。

生涯学習の資料としても、本論の意識調査の活用できる要素は多く、今後の社会人としての生活と生き方に示唆ある内容となっている。

ホストファミリーとしての日常的な異文化接触の経験は、これからの多文化共生社会を支える現実的な力として蓄積されて、実生活で機能し、より多くの人と家族がホストファミリーを経験していくことが、多文化共生社会の原動力となり草の根運動のエネルギーとなっていくことが期待される。

本論のホストファミリーの経験と意識に関する調査からは、そのような期待が単なる期待だけではなく、現実に体験として実を結び将来へ継続する力となっていくのが実感される。

2. 先行研究

2.1 ソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートとは、「社会的支援」とも呼ばれ、情報的、評価的、手段的、情緒的サポートに分類される（House, 1981）。自分の周囲にいる人たちから得られる物理的、心理的援助を指し、個人の精神的安定や健全に不可欠の要素と考えられる（浦, 1992；マグワイア, 1995；スコット, 1989）。元来は医療分野で健康と環境との関係に着目した研究に端を発し、「良好な対人関係は人の健康に好ましい影響を及ぼす」というのがソーシャル・サポート研究の基本的な命題である（浦, 2009, 46）。スコット（1989, 201）によると、ソーシャル・サポートは社会関係の存在と支援の提供を包括するような統合的な概念であり、社会心理的な健康や安寧（well-being）に重要な影響を及ぼすというさまざまな知見を与えてくれる（Cohen,S. & Syme,S.L., 1985）概念である。

2.2 留学生のホームスティとホストファミリー

在日留学生をホームスティの中で考察した研究には、手塚（1991）、山本（1996）があり、いずれもホストファミリーの視点からホームスティでの異文化間コミュニケーション問題を取り上げている。手塚（1991）は、ホームスティの事例を、主として受け入れ家庭の視点から、①異文化間コミュニケーション、および、②日本文化と日本人の心理という二つの枠組みから、「えらびの文化」と「あわせ文化」、「率直さ」と「察し」という対立概念を用いながら検討している。山本（1996）は、受け入れ経験豊富なホストファミリーと、初めて受け入れを行う新しいホストファミリーとでは、ホームスティ者との対人意識に、

いわば西洋型と日本人型のコミュニケーションの型と意識の違いがあることを指摘し、受け入れ経験に伴って、両者の相違が埋まっていく傾向があると述べている。一方、藤野・田中（2006）では、留学生とホストファミリーの視点から、ホームスティ場面でのソーシャルスキルを互いに共通するスキルとして、次の４領域、すなわちⅠ．文化・習慣の違いに対処するスキル、Ⅱ．お互いの対人関係を構築するスキル、Ⅲ．コミュニケーションを円滑にするスキル、Ⅳ．適応上の困難に対処、の四つがあるとし、ホストには更にⅤ．受け入れ態勢を整えるスキルを認めて、スキル獲得が相互理解に有効に機能することを示唆している。

2.3 異文化間コミュニケーション、異文化接触、異文化間トレランス

佐藤（1999）は、「異文化間コミュニケーションは、自分の文化的枠組みを相対化し、異なった文化をもつ人との『共同作業』により、新しい関係性を構築する作業」だと述べ、小澤（2001）は、上述の佐藤の言う作業過程において、「異文化間トレランスは、異文化間コミュニケーション場面における文化的な差異やコミュニケーション方法の差異によって生じる葛藤を解決するために必要である」（小澤. 2001, 32）と述べている。さらに小澤（2001, 33）は、個人の異文化間トレランスを、「葛藤や不安などに我慢強く〈耐える〉だけでなく、異質な他者を受け容れていく〈寛容さ〉、さらには自分自身を立て直すという広い意味」に捉えることが必要だと述べている。以上の知見を踏まえ、横林（2002, 32）は、「異文化間トレランス」は、「耐えることのできる力」から「受け入れ、認めることが出来ること」「共生的関わりを持てること」までの幅広い範囲を含む概念であると想定する。

2.4 生涯学習としての異文化間教育

一二三（2010, 77）は、多言語や多文化が共存する社会での異文化接触場面で起こる心理的変容を、「共生的学習」の機会と捉え、生田（2010）では、生涯学習の観点から、シティズンシップ（市民性）と異文化間教育のありかたについて、「複数の文化間の接触や相互作用とその結果生ずる葛藤や統合などを分析する『相互作用的アプローチ』の重要性」（生田, 2010, 15）を指摘している。

以上の先行研究から概観されるように、ソーシャル・サポートから見たホームスティにおけるホストファミリーの存在と役割は、留学生との日常的な異文化接触を通じて留学生の異文化適応をどうサポートするかにも関わっている。ソーシャル・サポートはまた、ホストファミリーと留学生の双方の異文化間教育にも関連し、ホストファミリーの経験と意識は、サポートを行っていく中で、共生のための社会を視点とする生涯学習の視点にも繋がっている。このような視点からの、ホストファミリーと留学生の双方に関わるホームスティとソーシャル・サポートについての議論は、従来あまり行われておらず、今後の多文化、多言語の共生社会を見据えて、その考察の果たす役割は将来に意義深い貢献をもたらすものと考える。

3. 本研究の目的

本研究でのリサーチクエスチョン（以下、RQ. と記す）は以下のとおりである。

RQ. ホームスティにおけるホストファミリーの経験と意識の内容は、ソーシャル・サポートを受ける留学生のホームスティ評価とどのように関係しているか。

4. 調査方法と参加者

本調査の参加者は、2009年９月から2010年５月まで関西の中規模私大であるＫ大学に、短期プログラムの留学生として９カ月間滞在した40名の留学生のホストファミリーの内の28家族である。

調査方法は、まず初めに、７月末の留学生の来日前に開催されたホストファミリー会の場を借りて、この調査がホストファミリー（以下、必要な場合を除き、「ホスト」と略す）の経験と役割の意識調査についての私的な個人研究であることを説明し、調査に協力のお願いをするところから始まった。その後、2009年の８月末に郵送で40の家族に記述用紙を送付し、自由記述回答の依頼を行った。回収率は70％であった。

この調査は、「ソーシャル・サポートとホストファミリーの役割」についての予備調査として行われ、回答はすべて自由記述になっている。ホストの中には、これまで、Ｋ大学の留学生だけでも過去、16人の学生にホームスティを提供した長期のホスト経験者から、今回初めて応募した新しいホスト志願者[(3)]もいる。ソーシャル・サポートを（A）「提供したサポート経験」と今後のサポートに対する可能性の（B）「抱負と期待のサポート」の二つの視点から捉えて、ホスト経験者とホスト志願者の調査の質問項目には相違を設けた。したがって、後述の参加者のデモグラフィーについては、経験者と新しい志願者のホストを二つのグループに分けて記述している。以下、参加者のデモグラフィーは、表１「調査参加者のホストファミリー数」、表２「2009年度に留学生と一緒に生活する、ホストファミリーの家族構成の人数」、表３「ホストファミリー経験者の家庭にこれまでホームスティした留学生の人数と、受け入れの家族数」、表４「ホストファミリー経験者の家庭にホームスティした留学生の国籍と述べ人数」、表５「アンケート回答の記述者の年代と性別」[(4)]となっている。

表１　調査参加者のホストファミリー数

参加者（＝合計家族数）	調査大学での ホストファミリー経験者	調査大学での 新しいホストファミリー志願者
28家族	18家族	10家族
＊経験者と志願者のホストファミリーの合計数		＊ここには、調査大学以外での経験者や１週間から２ヶ月程度の短期の経験者も含まれている

表2　2009年度に留学生と一緒に生活する、ホストファミリーの家族構成の人数

留学生と一緒に生活する ホストファミリーの家族構成人数	調査大学での ホストファミリー経験者数	調査大学での新しい ホストファミリー志願者数
a. １人	3	0
b. ２人	7	2
c. ３人	5	4
d. ４人	3	3
e. ５人以上	0	1
合　　計	18	10
	＊ホストを経験する年月の中で、子どもが独立したりして、家族人数に変化があったと回答した数が７件あった。	

表３
「ホストファミリー経験者の家庭にこれまでホームスティした留学生の人数と家族数」

	これまでにホームスティをした留学生の人数と家族数	
ホストファミリー経験者	留学生の人数	家族数
	a. １人	2
	b. ２人	2
	c. ３人～５人	4
	d. ６人～10人	2
	e. 11人～15人	6
	f. 16人以上	2
合　計		18
	＊ここでの留学生数は、調査大学の留学生のみに限定している	

表４
「ホストファミリー経験者の家庭にホームスティした留学生の国籍と述べ人数」

	ホームスティをした留学生の国籍と人数	
ホストファミリー経験者	国籍	留学生数
	a. アメリカ	102 名
	b. カナダ	11 名
	c. イギリス	9 名
	d. オーストラリア	9 名
	e. ドイツ	3 名
	f. 台湾	3 名
	g. フランス	3 名
	h. 韓国	2 名
	i. 中国	1 名
	j. オランダ	1 名
合計		144 名

表5「アンケート回答の記述者の年代と性別」

アンケート回答の記述者の年代と性別				
アンケート記述者の年代と性別	調査大学でのホストファミリー経験者		調査大学での新しいホストファミリー志願者	
	男性	女性	男性	女性
b. 30才代		3		3
c. 40才代		4	1	1
d. 50才代		1	1	1
e. 60才代	1	8		3
g. 70才代	1			
合計	18		10	

5. 分析の内容・方法と背景

5.1 調査内容と分析方法

前述のように、本調査は、ホスト経験者と新しいホスト志願者とを分けて、(A)「提供したサポート経験」と（B)「抱負と期待のサポート」の二つの視点から行っている。そのため､質問項目は両者に共通する質問と､上記の（A）と（B）のサポートについての別々の質問から成っている。両者に共通する質問としては､「なぜホストファミリーをするのか」という理由を問う質問がある。しかし、この共通の質問も、ホスト経験者にとってはホスト継続の理由を問うものであり、ホスト志願者にとっては志願の理由を問うものであるので、本来は別々の分析が求められる性質のものであるが、経験者と志願者を問わず共通した回答内容が多かったという事実から、本論では、両者の回答を「ホストファミリーをする理由」として一つにまとめて記述し分析している。経験者と志願者に別々に行った質問項目では、経験者に対しては、ホストとしてこれまで経験し実施したサポートについて問う（A)「提供したサポート経験」を中心にした内容の質問があり、ホスト志願者には「今後、どのようなサポート実施の可能性と期待があるか」の（B)「抱負と期待のサポート」を中心にした内容質問がある。いずれの質問項目についても、非構造的な自由記述の回答を求めており、回答者の記載内容量は概して多かった。

以下、Ⅰ．ホストファミリーをする理由（共通質問)、Ⅱ．ホストファミリーがうまくいくために大切なこと（経験者への質問)、Ⅲ．ホストファミリーをして楽しいこと（経験者への質問)、Ⅳ．ホストファミリーをして困ること（経験者への質問)、Ⅴ．ホストファミリーを経験して得たこと（経験者への質問)、Ⅵ．留学生とのコミュニケーション方法（経験者への質問)、Ⅶ．留学生が家庭になじんだと感じるのはどんな時か。なじむにはどのぐらいの時間がかかるのか。(経験者への質問)、Ⅷ．新しいホストとしての抱負と期待（新しいホスト志願者への質問)、の八項目に及んで得た回答を対象に、分析と考察を行う。

分析方法については、上記の質問項目のⅠ～Ⅵについては、それぞれの質問について回答の記述を全て書き出し、次にＫＪ法を用いて全記述をまとまりに分類した。その後、最終的なカテゴリーにまで分類した後に各カテゴリーの下位項目の内容に共通した命名を行い、アルファベットの小文字により太字の見出しをつけて以下に記述した。

また、以下の質問、Ⅶ．留学生が家庭になじんだと感じるのはどんな時か。なじむにはどのぐらいの時間がかかるのか。(経験者への質問）と、Ⅷ．新しいホストとしての抱負と期待（新しいホスト志願者への質問）については、個々の記述を尊重し、ホストの記述要点を幾分まとめはしたものの、できるだけありのまま掲載することを心がけ、結果的に羅列的な記述となった。

5.2 分析の背景

ソーシャル･サポートを受ける留学生にとっては､どのようなサポートを受けたときに、それを有益なサポートだと評価するのか。原田（2010b）では、本論の調査大学と同じＫ大学を対象に、2008-10年度の２年間にわたって、それぞれ９カ月間ずつホームスティした留学生72名を参加者に､「ホームスティにどれぐらい満足し、どのようなサポートを有益だと評価しているのか」を調査した。その調査では、ホームスティに対する満足度については､「強く満足している」から「全然満足していない」を５段階のスケールにより測定し、その結果は表６のように示された。Ａ.前期、Ｂ.後期、およびＣ.年間の満足度（前期と後期の満足度の平均）の記述統計量は表６のように示された。Ａ～Ｃの各平均値は4.38、4.39、4.385となり、いずれも留学生がホームスティに対して高い満足感を得ていることを示している。[5]

表６．ホームスティの満足度
（2008－10年度の2年間の前期と後期別、および年間（前期と後期）の平均）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
Ａ.前期のホームスティの満足度	72	1	5	4.380	0.985
Ｂ.後期のホームスティの満足度	72	1	5	4.390	0.987
Ｃ.年間のホームスティの満足度	72	1	5	4.385	0.914

また、上記の表６の作成に当たり､「ホームスティにどれくらい満足しているのか」という質問とは別に、同一の72名の留学生の参加者に対して､「ホームスティの経験について、どう評価しているか」という質問を行い、自由形式により回答を記述してもらった。その自由記述回答を内容分析により分類し、留学生にとって有益だと評価された「正の評価」サポートをカテゴリー別に分けた結果、表７のように７項目に分類された。

表７　ホームスティについて留学生が有益だとする「正の評価」
（前期と後期と年間合計）

	前期			後期			年間（前・後期の合計）
項目	この項目を評価した学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	この項目を評価した学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	この項目を評価した学生の延べ人数
1. 日本語コミュニケーションの練習と上達	43	72	59.7%	42	72	53.8%	79
2. 暖かい家庭と家族の提供	31	72	43.1%	36	72	50.0%	73
3. 日本社会で暮らす支援	23	72	31.9%	18	72	25.0%	38
4. 日本人家族との暮らし経験による学び	17	72	23.6%	15	72	20.8%	35
5. 日本文化の理解と学習	17	72	23.6%	14	72	19.4%	29
6. 良い食生活と住居の保障	14	72	19.4%	12	72	16.7%	28
7. 人間形成と成長の支援	3	72	4.2%	9	72	12.5%	12
合　　計	148			146			294

上記の７項目は留学生から見たホームスティのサポートについての「正の評価」と項目である。留学生はホームスティにより、上記１～７の項目について、留学中に有益なサポートがあったと評価している。

本論においては、以上の留学生の視点での分析とは別に、次の章６に、ホストの視点による（A）「提供したサポート経験」と（B）「抱負と期待のサポート」についての自由記述から、その「分析結果」をカテゴリー別に記す。そして、章７「考察」において、留学生の評価の視点とホストの経験と意識の照合を行い、考察を試みる。

6. 分析結果

Ⅰ．ホストファミリーをする理由

a. 家庭に新たな活気と張り合い

1. 留学生が加わり生活に張り合いができる
2. 夫婦二人の生活に刺激と生きがいが生まれる
3. 留学生からパワーが得られる
4. 家庭が賑やかになる
5. 話し相手ができて寂しさが紛れる
6. 新しい経験ができる
7. 世界と視野が広がる
8. 留学生の成長を見るのが楽しい
9. 定年退職後の有効な人生活用
10. 子供達の独立後に空いた部屋の有効利用

b. 異文化の接触と交流

1. 海外の文化と考え方に触れたい
2. 日本を知ってもらいたい
3. 生活を共にしながらの異文化体験と相互交流ができる
4. 国際交流に役立ちたい
5. 家族で国際交流に参加したい
6. 学生の帰国後も付き合い、世界中に知り合いができる
7. 子供が異文化体験をする中で成長できる
8. 共に生活することで、外国が身近な存在になる

c．自己啓発

1. グローバリゼーションの潮流に遅れないように視野と見識を拡大
2. 英語を勉強する動機となる
3. 異文化を知ることで刺激となる
4. 日本語と英語で説明するために脳のトレーニングになる
5. 外国人の気質や若者の流行を知り自分が高められる
6. 本物の異文化や考えに触れ、知識や情報とは異なる体験ができる
7. 日本人からは得られない考えや知識が得られる

d. 留学経験からの恩返し

1. 夫や妻の留学経験から感謝の恩返しをしたい
2. 留学経験で重要な役割だと認識
3. 子供が留学で世話になり、嬉しかった

e.子供の教育のために

1. 子供の英語の勉強に良い
2. 子供の国際交流の経験のため
3. 兄姉の家族ができたと子供が喜ぶ
4. 子供に語学力と国際感覚を身につけさせたい
5. 一緒に旅行や遊びの体験ができる

f．社会的貢献とサポートがしたい

1. 留学生が安心して勉強できる手伝いがしたい
2. 日本語で日常会話ができるようにサポートしたい
3. ホストファミリーとして社会に貢献したい
4. 外国人の世話をすることで役に立ちたい

Ⅱ．ホストファミリーがうまくいくために大切なこと

a．家族のルールを伝える

1. 初日に、どうしても守ってもらいたいことを英語で書いて渡す
2. トイレ、洗面所の使用法、挨拶、食事の時間、食後の過ごし方などの基本的なルールをしっかり伝える
3. ある程度、生活ルールを決めて話し合いながら進めていく
4. お互いの予定を前もって伝え合う
5. 家庭に早く適応してもらうために言いたいことをしっかり伝える
6. おかしい、間違っていることは早く指摘する

b. 暖かい家庭を提供する

1. 朝夕の送り出しと出迎えは気持ち良くする
2. 自分の子供と同じ気持ちで接する

c．自由の保障をする

1. 自由をある程度は認めてあげる
2. あまり構わないで、自分に責任を持たせる

d．家庭の食事を楽しむ

1. 家族が揃って食事をし食事時間を大切にする
2. 嫌いなものを出すのを控え食事を楽しくする

e. 生活適応のサポートをする

1. 勉強、友人との遊びなど快適な留学生活のためのサポートをする
2. 留学生を理解し、全てを受け入れられるように努力する
3. かげながら適応のサポートを続ける

Ⅲ．ホストファミリーをして楽しいこと

a．コミュニケーションすること

1. テレビを見て同じ話題で話しができること
2. 学校、その他の話しをしてくれること
3. 下手な料理でも喜んで写真を撮ってくれること
4. 食事時に色々な話題が出ること
5. 会話がはずむこと
6. 帰国してからメールで便りがあること

b．楽しそうな様子を見ること

1. 留学生が生き生きして楽しそうなとき
2. 食事をたくさん食べてくれるとき
3. 仲良くなろうとして学生の方から歩み寄ってくるのが感じられるとき
4. 宿題など日本語の勉強について、真剣さを感じるとき
5. 日本語が日に日に上達し、日本に好意を持っているのを感じるとき

c. 留学生から学ぶこと

1. TV、.音楽、ゲーム、まんが、アニメなど若い感覚から学ぶとき
2. 普段なら、しない事にも学生のいることで、あえて挑戦し前向きになれること

d. 一つの家族だと実感すること

1. 子ども達も一緒にクッキーを作ったり遊びに行ったりしたとき
2. 留学生と旅行したり一緒にいろいろな所へ出かけたりするとき
3. 独立した子どもが帰ったときに大パーティやゲームをしたとき
4. 帰国したあとでも、近況を伝えてくれるとき
5. 数年後に「ただいま」と訪問してくれるとき
6. 家族だけではしなくなったクリスマス、誕生日などのお祝いに、必ず、プレゼントを用意してくれるとき
7. 家族一緒に笑い、意見を言うなどの日常生活の些細なとき
8. 全員で食事をしているとき
9. 料理を「おいしい」と食べてくれるとき

e. 異文化交流ができること

1. 学生の国のいろいろな話をしてくれるとき
2. 相手の国を訪問するとき
3. ご両親が訪問してくれたとき
4. 手紙、写真を送ってくれたとき
5. 学生の結婚式に出席したとき
6. 学生の家族やその国のことを知るとき

Ⅳ．ホストファミリーをして困ること

a. 家のルールや約束をやぶる
1. 食事が要らないのに電話をしてこないこと
2. シャワーや洗面所の使用時間が長いこと
3. ゴミ出しのルールを守らないこと
4. 計画を勝手に変更すること
5. 物を失くすこと
6. 自由気ままに外出し、よそのお宅に迷惑をかけること
7. 頼みごとをたくさんすること
8. 自国では一人の生活なので家庭のルールに合わせてもらうのが大変なこと
9. 家になじまない学生は手伝いが少ないこと

b．整理整頓と汚れ物
1. 部屋の掃除をしない
2. 部屋の整頓ができない
3. 洗濯物をためて臭う
4. 洗濯物にガム、紙、お金が混入する

c．インターネット、電気代
1. インターネットを自由に使用させたらエラーやウィルスなどの支障が起きた
2. エアコンをつけ放題にし電気料金の節約など考慮なし

d. 病気、ケガ、トラブル
1. 留学生に病気、ケガ、トラブルが起こったとき
2. 病気でも医者に行かないとき
3. 家族に病人が出たとき

e. 留守、旅行ができない、自分達の予定が後回し
1. 旅行に行きにくくなった
2. 夕食が要るのか要らないのかその時までわからず、自分達の予定が先に決められなかった
3. 家族が留守の際の食事のこと

f．食事の好き嫌い
食事の好き嫌いがある学生に苦労した

g．異性問題
異性問題が起きたとき

h．拒否反応
1. 日本の習慣、食事に拒否反応を示すとき
2. 学校になじまないとき

i. 言いにくいことを伝える
生活態度、生活習慣、電気器具の使用など、言いにくいことを伝えなければならないとき

j. 真意がわからない
1. 喜怒哀楽を表さないので、家族に気を遣っているのではないかと心配する
2. 後で、食事を無理して食べていたとわかったこと

k. 帰宅が遅いとき
連絡があっても帰宅が極端に遅いと事故でもあったかと心配

l. 気持ちの食い違いが起こるとき
常に友人との約束を優先するので、こちらの約束が当日になるまでわからず、気持ちが萎える

Ⅴ．ホストファミリーを経験して得たこと

a．留学生やその家族との交流
1. プログラム終了後も休暇などには我が家を訪れる
2. 留学生の家族の来日や、こちらからの訪問
3. 誕生日、父の日、母の日にレターをもらうなど、暖かい心遣いがある

b. 異なる文化・考え・価値観との出会い
1. 学生の母国の現状や地方の文化、日常生活が理解できた
2. 田舎育ちの学生が質素な生活を心がけていたことから、アメリカが使い捨て文化との偏見を捨てた
3. 国や性別で人を判断してはいけないと実感した

c. 人間同士は通じ合えるという認識
1. 国は違うが考えは同じ
2. 異文化接触についての不安は同じだから、そこから一歩進むこと
3. 外国人への違和感がなくなった

d．家族の意識の変化
夫が家庭運営によく協力するようになった

e. 日本代表の意識
1. いつも考えるのは、自分は個人ではなく、日本人代表として留学生と向き合っているという意識
2. 国際交流に貢献していることの自負と感謝

f．いろいろな留学生と交流できる
自宅の留学生だけではなく、他の留学生とも交流ができる

g. 人間としての成長
1. ホストファミリーをすることは他人と住むこと。良いことばかりではない。しかし、その経験により人間のレベルアップがあり人生経験となる
2. 努力の半分は理解してもらえず、いやなこと悲しいことがある中で、20％は素晴らしい経験。20％のためにすることに価値がある
3. 良いこといやなこともある中で、世の中を大きく見られるようになった

h．ホストファミリー間のつながり
ホスト同士のつながりができ、共通の理解が心強い

Ⅵ. 留学生とのコミュニケーション方法
①（留学生とどんな言語で話すか。コミュニケーション方法の工夫と苦心）

a. 日本語だけ使用

1. いつも辞書を傍らに置き、すぐに使える状態にしておく
2. 電子辞書を使いながら話す
3. やさしい日本語でゆっくり話す
4. わかるまで何度も話しかける
5. 手振り、身振りを交えて理解しあう
6. 会話の背景となる「学校での出来事」「昼食は何を食べたか」「授業や友人のこと」をこまめに話し、情報を得ておく
7. 日本語が早く上達するように、できるだけ頻繁に話しかける
8. たわいないことでも、たくさんしゃべることが肝心
9. 帰った時の様子を見て話しかける
10. 日本語習得に役立つように常に心がけている

b. 日本語と英語を使用

1. 主に日本語で話すが、理解に困る時には英語まじりの日本語で話す
2. 基本的には日本語だが、初期には英単語も交える。コミュニケーションを取るためには、下手な英語でも厭わない
3. 子供が留学を経験しているので、理解困難なときには、子供に英語で話してもらう
4. 日本語初級レベルの学生には理解し合いたいのが優先して英語になることがある
5. 家族の英語力はあまりないので、逆に混乱することがある

Ⅵ. 留学生とのコミュニケーション方法
②留学生の日本語について、気をつけていること

1. おかしい言葉遣いは正しく教える
2. 一語一語については特に注意しない。その内に上手になる
3. 言い間違いや覚え違いは正しく使えるように直す
4. 大きい声でゆっくり話す
5. 普段使う言葉で話す
6. 当初は「です」「ます」体で話す。慣れてくると自然に口語体になっていく
7. 関西弁は文化なので普通に使う
8. できる限り標準語で話すように心がけている
9. こう言いたいということがわかれば、「こう言いたいの？」と尋ねる
11. 乱暴で品のない言葉は使わない
12. 留学生は日本語が上達したいために来日しているので、間違ったときにはその場で直してあげる
13. 上達するために日本人の友人をたくさん作り、会話をするように勧めている
14. 特別なことはしないが礼儀は教える。また、節分、月見などの行事をする
15. 少しくらいの文法の誤りは気にせず、まずは楽しく会話をすること
16. 神戸弁、大阪弁を得意げに話すことがあるが、品のない言葉だったら注意する
17. 「めっちゃ」「すんげえ」などの流行語やマンガの影響には気をつける
18. 留学生がその言葉の漢字を知っているのに発音がわからない時には紙に書いてもらう

Ⅶ. 留学生が家庭になじんだと感じるのはどんな時か。なじむにはどのぐらいの時間がかかるのか。

1. 個人差もあるが３日ぐらいでなじんだと思う学生もある。女の子だったら料理をしている所を見にきて話したり、家族の話をしたり、食後ゆっくりコミュニケーションをする時。男の子はさっぱりしていて、１ヶ月もかからないと思う。少し酔って帰った時など、その雰囲気を話してくれる時
2. 我が家では子どもが小学生の為、休みの日も８時には朝食をとるが、朝、声をかけないと起きてこなくなった時になじんだと感じた
3. 個人差があるが、平均１ヶ月ぐらい、早い人は数日で。正面に向き合った会話ではなく、部屋の中と外のちょっとしたやりとりや、スーパーへの買い物途中などにお互いが前を向いた状態での会話の時にリラックスしてきたなと感じる
4. 約１ ヶ月ぐらいだと思うが、学生によっていろいろあり、何とも言えない。自分から進んで家族に溶け込もうとしているとき
5. ９月から12月までの４ヶ月を要する。その間、性格、食事の好き嫌い、その他が見極められる。居間に来てリラックスして、テレビを見てる時とかになじんだかなと感じる
6. 人それぞれで、来日して１ ヶ月経たないうちに家族と打ち解けて何年も前から一緒に住んでいるような学生がいた。ある学生は１ヶ月半～２ヶ月ぐらいで家族と仲良くなった。去年の学生は偏りがあって帰国するまで親密に・・！とはいかなかった。我が家はジョークが好きで最初からジョークを言って留学生を笑わせるようにしているのでうちとけるのも早いように思うが、性格は人それぞれなので無理な場合もあった。自分で飲みたい物を作ったりみんなのいる部屋で寝転んだりしたとき
7. 個人差があり、回答が難しい（１週間～１ヶ月？）、大学からの出来事を自分から話してくれたりする時
8. ２週間ぐらいで、大体、生活のリズムに慣れ、家族の一員としてやっていこうというように見えてくる
9. 食事の時間やシャワーやお風呂の使い方や洗濯の回数などの習慣は１～２ヶ月たたないと慣れず、それまでは違和感があるようだ
10. 家族のリズムや日本の生活スタイルに慣れ、遠慮や気兼ねをしないで気持ちを伝えることができるようになるまで、１ヶ月ぐらいかかる。ニコニコじゃなくて心からの笑顔が出てくると、慣れてきたと感じる

11. ２～３ヶ月位で50％はなじむと思うが、お互いに心を割って何でも遠慮しないで話せたり行動するような親子のような関係は年を越した１月ぐらいだと思う。お正月ぐらいの日本の文化を目のあたりに見て体験し、日本文化にとけこみ日本人の心がわかってくると思う
12. 初めはぎこちないが、呼び方や自分の生活の出来事など話しかけられることが多くなった時、約１ヶ月～２ヶ月後ぐらいで、なじんだなと感じられる
13. 留学生によるが、なじむまでに３ヶ月ぐらいかかると思う。家族とのいろんな行事（誕生日とか）や日本の行事などを経験することにより信頼感が生じ、それを繰り返しながらなじんできたと感じる
14. １～２ヶ月ぐらいで、自然になじんでいくと思う
15. ２～３ 週間位でリビングで一緒に勉強するようになった時になじんだと感じる
16. ２． ３ヶ月ぐらいが平均的だが、家庭内でこだわりなく、自由きままに振舞ってくれる姿を見かけるようになった時
17. 個人によって違うが、１ 週間もすると １ 年間も一緒に生活しているような子もいるし、３ヶ月たってもよそよそしい子もいる。留学生のリズムと私たちの生活のリズムが合いだした時になじんだと感じる

Ⅷ. 新しいホストとしての抱負と期待

a. 留学生に日本の生活・文化を理解してほしい

1. 日本の庶民生活を体験してほしい
2. 日本のマナーを身につけてほしい
3. 実際の経験により、現実の日本を理解してほしい
4. 日本の文化に触れて、良い点、悪い点を感じてほしい
5. 日本の生活・習慣・文化を直接に体験してほしい
6. 日本に好感を持ってほしい
7. 日本人は暖かいことを知ってほしい

b. 留学生をサポートしたい

1. 留学生が安心して勉学に励めるようにサポートしたい
2. 日本語で日常会話ができるようにサポートしたい
3. 異なる文化の人の役に立ちたい

c. 家庭の暖かさを提供したい

1. 日本に一緒に暮らせる家族がいることで安心して過ごしてほしい
2. 身近な日本の家族の存在を味わってほしい
3. 我が家を居心地よく感じてもらいたい
4. また日本へ来たいと思わせる家庭を提供したい

d. 留学生に国際的な視野の契機を提供したい

1. 国際人となるきっかけの場としたい
2. 国際人の視野を与える場にしたい
3. 将来につなぐ架け橋となる機会を提供したい
4. 母国の良さを再発見してもらいたい
5. 人間関係と家族関係の普遍的な価値を再認識してもらいたい

e. コミュニケーションに期待

1. 留学生といろいろなことを話したい
2. 家族の話題が増えることが嬉しい
3. 留学生に日本語が上手になってほしい

f. 若い人の活力と刺激を期待

1. 若者が家にいることで生活に張り合いと活力が生まれる
2. 若いエネルギーで家庭に笑顔が多くなる

g. 自己の変化と再発見

1. 異文化の人との接触により、自分の偏見を改める
2. 異文化接触により、自分を再発見する

7. 考察

7.考察を記すにあたり、RQ.を以下に再度記述する。

RQ. ホームスティにおけるホストファミリーの経験と意識の内容は、ソーシャル・サポートを受ける留学生のホームスティ評価とどのように関係しているか。

前述の5.2において、調査を実施した大学の72名の留学生のデータ結果から、留学生がホームスティのサポートに高い満足度を示していることは既に述べた。また、満足度についての質問とは別に、留学生に対し、「ホームスティ経験について、最も肯定的だった点や満足した点は何か」という質問を行い、自由形式で前期、後期の各学期ごとに2年間にわたり、計4回の回答をしてもらった。その結果を、内容分析により1～7のカテゴリー項目に分類し、5.2に表7「ホームスティについて留学生が有益だとする『正の評価』」として掲載した。

以下の「7. 考察」においては、ホストファミリーのどのような経験、意識、行為、抱負と期待が、留学生のホームスティについて有益だとする『正の評価』の7項目のサポートと結びついているのかを、ホストファミリーの自由記述の分析結果から検討してみる。

1. 日本語コミュニケーションの練習と上達

分析結果の「Ⅲ. ホストファミリーをして楽しいこと」において、「a. コミュニケーションすること」の中で、ホストは留学生とのコミュニケーションを、1. テレビを見て同じ話題で話しができること、2. 学校その他の話しをしてくれること、3. 食事時に色々な話題が出て楽しいこと、4. 会話がはずむこと、として挙げている。上記のホストが楽しいとする内容は、留学生がホームスティのサポートとして評価する内容に挙げた「1. 日本語コミュニケーションの練習と上達」と相互に関係し、合致するものである。また、「Ⅵ. 留学生とのコミュニケーション方法」①（留学生とどんな言語で話すか。コミュニケーション方法の工夫と苦心）において、1.辞書を傍らに置きすぐに使える状態にし、2. やさしい日本語でゆっくり話す、3. わかるまで何度も話しかける、4. 手振り、身振りを交えて理解しあう、5. 会話の背景となる「学校での出来事」「昼食は何を食べたか」「授業や友人のこと」をこまめに話し情報を得ておく、6. 日本語が早く上達するようにできるだけ頻繁に話しかける、7. たわいないことでも、たくさんしゃべることが肝心、8. 帰った時の様子を見て話しかける、9. 日本語習得に役立つように心がけている、のように、留学生とコミュニケーションをとることを心がけ、また、コミュニケーション内容に工夫と努力を行っている。そのような環境の中で、留学生は「日本語コミュニケーションの練習と上達」のサポートが与えられていると認知し評価していると理解される。また、Ⅵの②に示した「留学生の日本語について、気をつけていること」の1～18の回答の中に、ホストが留学生の日本語習得に関心を持ち、ホストとして日本語の上達に多大なサポート

を行なっている様子が窺える。

2. 暖かい家庭と家族の提供

分析結果の「Ⅱ．ホストファミリーがうまくいくために大切なこと」として、「b．暖かい家庭を提供する」がある。その内容には、１．朝夕の送り出しと出迎えは気持ち良くする、２．自分の子供と同じ気持ちで接すること、が挙げられている。また、Ⅱの「ｄ．家庭の食事を楽しむ」という項目には、１．家族が揃って食事をし食事時間を大切にする、２．嫌いなものを控え食事を楽しくする、ことをホームスティの成功秘訣として挙げている。さらに、「Ⅲ．ホストファミリーをして楽しいこと」として、「ｄ．一つの家族だと実感すること」という太字の見出しに見られる９項目の内容が挙げられている。また「b. 楽しそうな様子を見ること」の見出しとその項目の中には、留学生を家族として受け入れ、留学生の生活を支えるという「暖かい家庭を提供すること」がすなわちホストの楽しみであると考えているのが読み取れる。留学生はこれらのホストの意識を、表題の「２．暖かい家庭と家族の提供」のサポートとして受け止め評価していると思われる。また、新しいホストが「Ⅷ. 新しいホストとしての抱負と期待」として「c. 家庭の暖かさを提供したい」の見出しの項目の中で、１．日本に一緒に暮らせる家族がいることで安心して過ごしてほしい、２．身近な日本の家族の存在を味わってほしい、３．我が家を居心地よく感じてもらいたい、４．また日本へ来たいと思わせる家庭を提供したいと、サポートへの抱負を述べており、ホストの意識には、「暖かい家庭と家族の提供」がサポートの重要な要素であると認知していることが理解される。

3. 日本社会で暮らす支援

「Ⅱ．ホストファミリーがうまくいくために大切なこと」として、「e．生活適応のサポートをする」という見出しの中に次の１～３の内容がある。その内容は、１．勉強、友人との遊びなど快適な留学生活のためのサポートをする、２．留学生を理解し全てを受け入れられるように努力する、３．かげながら適応のサポートを続ける、というものであり、三つの「生活適応のサポート」内容からは、ホストが、留学生活適応の難しさと適応の重要性を汲み取り、留学生が快適な留学生活を送るためには、ホストが留学生への生活適応を暖かくサポートすることが大切であるとの認識が覗われる。また、ホスト志願者が、「Ⅷ. 新しいホストとしての抱負と期待」として、「ｂ．留学生をサポートしたい」という見出しの項目の中で、１．留学生が安心して勉学に励めるようにサポートしたい、２．日本語で日常会話ができるようにサポートしたい、と、このサポートへの抱負を述べている。当然ながら、「Ⅵ．留学生とのコミュニケーション方法と工夫」の②である「留学生の日本語について、気をつけていること」に記された各内容は、留学生が、「３．日本社会で暮らす支援」として、ホストからのサポートを受け、そのサポートの存在が留学生のホームスティの評価に繋がっているものと理解されるのである。

4. 日本人家族との暮らし経験による学び

留学生は、ホストが、本調査のⅠ～Ⅷの項目で回答した全内容で示す総合的経験と意識を踏まえて、それぞれが日本人家族と暮らした経験の中から、共に暮らした日々を貴重な体験だと評価していると推察される。例えばそれは家庭での食事のし方やマナー、「いただきます」「ごちそうさま」「行ってきます」「行ってらっしゃい」などの挨拶に込められた日本人の思いやりの表現方法であったり、時としては、Ⅱ.の「a. 家族のルールを伝える」や、Ⅳ.の「a．家のルールや約束をやぶる」の中の「ルールや約束」に象徴される、生活の中での衝突や葛藤、そして考え方や習慣の相違の発見を含めての総合的な評価を指す。ホストが「Ⅴ．ホストファミリーを経験して得たこと」の中で述べる、「b．異なる文化・考え・価値観との出会い」のように、留学生にとってもまた日本人家族と暮らした経験を通して、異なる習慣・考え・価値観を学び、それらを、表題の「４．日本人家族との暮らし経験による学び」として、ホームスティへの評価項目に挙げていると理解される。総合的には、日本人家族と暮らすことで、留学生は自国とは異なる意味空間の場所、自文化とは異なるコミュニケーション方法などの新しい発見を得たのである。この発見は、ホストと留学生が共にお互いの生活・文化・考え方を尊重しながら共に生活していくという複合的文化・生活への視野につながっていくものである。

5. 日本文化の理解と学習

本論のホスト経験者の調査回答からは、このサポートについて意識的な実行を行っている記述は見当たらない。しかし、「Ⅵ. 留学生とのコミュニケーション方法」の②の中には、14．特別なことはしないが礼儀は教える、また、節分、月見などの行事をする。とか、「Ⅶ．留学生が家庭になじんだと感じるのはどんな時か。なじむにはどのぐらいの時間がかかるのか。」の中で、13．留学生によるが、なじむまでに３ヶ月ぐらいかかると思う。家族とのいろんな行事（誕生日とか）や日本の行事などを経験することにより信頼感が生じ、それを繰り返しながらなじんできたと感じる、など、「日本文化の理解と学習」に関連した記述がある。また、新しいホストが、「Ⅷ．新しいホストとしての抱負と期待」の中で最も多くの回答を寄せたのが「ａ．留学生に日本の生活・文化を理解してほしい」であり、その中で、１．日本の庶民生活を体験してほしい、２．日本のマナーを身につけてほしい、３．実際の経験により現実の日本を理解してほしい、４．日本の文化に触れて、良い点、悪い点を感じてほしい、５．日本の生活・習慣・文化を直接に体験してほしい、ことを挙げ、留学生がホームスティでのサポートとして認知し評価している表題の「５．日本文化の理解と学習」について、ホストも十分に意識していることが理解され、両者のホームスティに対する姿勢の方向が一致していると見られるのである。

6. 良い食生活と住居の保障

「Ⅱ．ホストファミリーがうまくいくために大切なこと」として、「d．家庭の食事を

楽しむ」の見出し項目の中で、嫌いなものを控え食事を楽しくすることや、「Ⅲ．ホストファミリーをして楽しいこと」として、食事をたくさん食べてくれるときや、料理を「おいしい」と食べてくれるときなど、ホストがおいしく楽しい食事の提供に配慮していることが窺われる。一方では、「Ⅳ. ホストファミリーをして困ること」に、食事の好き嫌いがある学生に苦労したとの記述があり、ホストの苦労が推察される。住居の提供は、ホストを引き受ける際の基本的な条件であるが、留学生の評価には、「二度の食事と家の提供」は「基本的なことであるが、感謝している」との評価が見られる。

7. 人間形成と成長の支援

ホストのサポート全体の中で、留学生はこの表題に対する支援を総合的に受け取っていると考えられる。箕浦（1998, 131）は、異文化接触体験が人間形成に与える影響について、「異文化との接触で、当たり前と思っていたことが、当たり前でない世界があることを知って、初めて自分がどのような意味の世界に住んでいたかに気づく。このような経験が心的世界の再編成を促し、人間形成に資する」と述べ、小柳（2006. 5）は「異文化体験者（留学生）はホスト社会の人々との交流を通して、ホスト社会の文化規範を「このようなものだ」と自分なりに解釈し、それに対する自分の関わり方や態度を決めながら自己認識を形成していく。その過程に自己形成がある」と述べている。本調査のⅣ．にある「ホストファミリーをして困ること」として述べられた生活行為を含め、「Ⅴ．ホストファミリーを経験して得たこと」にある「b．異なる文化・考え・価値観との出会い」などを通じて、留学生はホームスティを、表題の「７．人間形成と成長の支援」の場と評価しているのであろう。同時にホストもまた、「Ⅴ．ホストファミリーを経験して得たこと」に挙げられているように、「c．人間同士は通じ合えるという認識」を経験し、「ｇ．人間としての成長」の評価を自らに与え、ホスト経験が学びの場であること認めている。ホスト志願者も同様にして、「Ⅷ．新しいホストとしての抱負と期待」の中で、「ｇ．自己の変化と再発見」という見出しの項目に、１．異文化の人との接触により自分の偏見を改める、２．異文化接触により自分を再発見する、ことをホストとしての新しい経験に求めているのである。

上記の記述からも、ホームスティが留学生とホストにとって、共に、自己変革から成長につながる場であるという認識と評価に繋がっていることが確認される。

8. 終わりに

今回の「ホストの経験と意識」についての自由記述を分析することにより、ホストは留学生のホームスティを通して、自身の生活に意義や活気や自己啓発を見い出し、ホストとしての役割を果たす中で、楽しみや困難と共に異文化接触や国際交流を経験していることが理解された。ただでさえ難しい他人との共同生活に加えて、異なる言語、異なる文化圏の留学生と生活を共にすることは、生活の中に、多くのトラブルや葛藤が起こることが、ホームスティの開始時から予想される。

しかし、それらの困難の中で、ホストは、留学生の日常生活を支え、さまざまな支援を行うというソーシャル・サポートの持つ意義を各自なりに捉えて、困難を乗り越え、共に楽しみながら生活している様子が覗える。自分達も学んでいるという経験から出た確信とホームスティに対する前向きの意識がホストを継続するエネルギーとなり、新たなホスト志願者を生み出す源泉となっている。そして、そのホストの経験と意識を留学生もまた認知し評価し、ホームスティに対する高い満足度への反応結果となっている。

今回の調査において、ホストの経験と意識が留学生のホームスティに対する評価と合致していることが確認でき、双方の生活行動が多少の食い違いや困難を見せながらも、互いに互いの努力や姿勢を評価していることが充分に伺えた。

今回は留学生がホームスティでの有益なサポートだと評価する点からの分析に終わったが、次回は留学生がホームスティについて、有益ではないとする負の点からも、ホストの経験と意識を分析することを課題としていきたい。

（注１）留学生が、ホームスティをすることにより、ホストとの対人関係とサポートの中で、日本語習得についていかに評価し成果を得ているかに関しては、拙稿「ソーシャル・サポートから見たホームスティと日本語習得―日本語能力はどんなサポートによって向上するのか」に詳しい。

（注２）日本を、世界に、より開かれた国とし、アジア、世界の間のヒト・モノ・カネ・情報の流れを拡大するために、「グローバル戦略」の一環として、2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指す目的で、2008年７月29日付けで文部科学省ほかの関係省庁により策定された。

（注３）ここで言うホスト経験者と志願者とは、調査大学に関する留学生のホスト経験と志願について限定してのことであり、他の機関のホスト経験については言及していない。

（注４）本調査は各ホストファミリーからの代表者としての回答であるため、アンケート回答の記述者の年代と性別を明示するようにした。

（注５）「ホームスティに対する満足度」の詳細な調査結果については、原田（2010b）の５.１を参照。

参考文献

(1) 安部裕子（2009）「日本人大学生の短期留学における異文化適応とソーシャル・サポート」『異文化間教育』*30*, 65-77. 異文化間教育学会　アカデミア出版会

(2) 生田周二（2010）「生涯学習の観点からみた異文化間教育―シティズンシップ教育との関連において―」『異文化間教育』*31*, 5-18. 異文化間教育学会　アカデミア出版会

(3) 浦光博（1992）『支えあう人と人～ソーシャル・サポートの社会心理学』セレクション社会心理学 8、サイエンス社

(4) 小澤理恵子（2001）「異文化間トレランスの＜耐性＞と＜寛容さ＞について」『異文化間教育』*15*, 31-52. 異文化間教育学会,　アカデミア出版会

(5) 小柳志津（2006）『感情心理学からの文化接触研究―在豪日本人留学生と在日アジア系留学生との面接から―』風間書房

(6) 佐藤郡衛（1999）「異文化間コミュニケーション」『国際化と教育―日本の異文化間教育を考える』放送大学教育振興会, 129-143.

(7) スコット，P. M.（宮城薫訳）（1989）「ソーシャルサポート」『医療・健康心理学』200-232.　中川米三・宗像恒次（編）福村出版

(8) 田中共子（2000）『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版

(9) 手塚千鶴子（1991）「ホームスティと異文化間コミュニケーション　―日本人ホストファミリーからみた留学生の場合」『異文化間教育』*5*,　135-144.

⑽ 原田登美（2010a）「ソーシャル・サポートから見たホームスティと日本語習得―日本語能力はどんなサポートによって向上するのか―」（未刊）
⑾ 原田登美（2010b）「ソーシャル・サポートにおけるホームスティの有益なサポート項目と有益でない項目―留学生のホームスティ評価」（未刊）
⑿ 一二三朋子（2010）「多言語・多文化社会での共生的学習とその促進要因の検討―日本におけるアジア系留学生を対象に―」『日本語教育』*146*, 76-89.
⒀ 藤野瑠弥・田中共子（2006）「ホームスティ場面におけるソーシャルスキル：在日留学生と日本人ホストファミリーの視点から」『留学生教育』*11*, 101-100.
⒁ マグワイア，L.（1994）『対人援助のためのソーシャルサポートシステム』小松源助・稲沢公一訳、川島書店
⒂ 箕浦康子（1998）「異文化体験と人間形成」『岩波講座 11 現代の教育国際化時代の教育』127-14. 佐伯胖他（編）岩波書店
⒃ 八島智子（2004）『第二言語コミュニケーションと異文化適応－国際的対人関係の構築をめざして』多賀出版
⒄ 山本直美（1996）「ホームスティにおける異文化間コミュニケーション－日本人ホストマザーの対人意識の分析から－」『日本語教育・異文化間コミュニケーション ―教室・ホームスティ・地域を結ぶもの―』149-173. 鎌田修・山内博之編, 財）北海道国際交流センター
⒅ 横林宙世（2002）「留学生のアカルチュレーションと異文化間トレランス」『異文化間教育』*16*, 32-48.アカデミア出版会
⒆ Adelman, Mara B. (1988) Cross-Cultural Adjustment: A Theoretical Perspective on Social Support. *International Journal of Intercultural Relations, 12*, 183-204.
⒇ Cohen, S. & Syme, S.L. (1985) Issues in the study and application of social support. In S. Cohen & S.L. Syme (Eds.) , *Social support and health*. Orland, Florida: Academic
㉑ House, J. (1981) *Work Stress and Social Support*, Reading: Addison-Wesley